

第61回全国小・中学校作文コンクールの中央  
最終審査会が行われ、各賞が決定しました。応募  
は3万7628点(小学校低学年5610点、  
高学年1万650点、中学校2万1368点)。  
入賞33点のうち、14点が東日本大震災に関連し  
たものでした。文部科学大臣賞3点を要約して  
紹介します。中学校の部の三船恭太郎君は、2  
年連続3回目の大臣賞に輝きました。

第61回 全国小・中学校

作文コンクール

文部科学大臣賞

- 中央審査委員  
桑原隆 (早稲田大学特任教授)  
榎久美子 (ノンフィクション作家)  
末吉曉子 (児童文学作家) (敬称略)

- 主催 読売新聞社  
後援 文部科学省、各都道府県教育委員会  
協賛 日本漢字能力検定協会、J R 東日本、J R 東海、J R 西日本  
協力 三菱鉛筆

中学校

「復興の光」

岩手大教育学部付属中3年

三船 恭太郎

三船 恭太郎



三月十一日、午後、学校で大きな揺れを感じた。  
この地震は内陸部だけなのだろ  
うか。もしも、沿岸部でも起  
こっているとしたら……津波が  
くるのではないか。  
地震からすぐに津波を連想す  
る習慣がついたのは幼稚園の頃  
だ。私の父は岩手県沿岸北部の  
出身だ。海は舌を刺すの  
だと父は教えてくれた。  
内陸部のガソリンスタンド周  
辺は、どこもガソリンや灯油を  
求める人や車で混み合い、目を  
追うと行列は長くなってい  
った。背に腹は代えられず、そ  
の行列に並んだときだった。  
赤色灯を点滅させながら走る  
十数台の車が目に入った。先頭  
の車はフロントに「災害派遣」  
と書かれた布をはためかせてい  
る。奈良県警の車だった。  
「がんばってきなさい。どう  
か、どうかよろしく頼みます  
ます。」  
父が運転席から身を乗り出し  
て、両手を左右に大きく振って  
いた。警察官は、手を挙げ力強  
く頷き返した。  
「ありがたい。こんなに早く  
駆けつけてくれるなんて。な  
あ。」  
父は少し興奮したような口調で  
振り返ったが、私は投げかけら  
れた視線に應えられず、車列が  
通り過ぎてから体を起した。  
私はこのとき、自分自身の気持  
ちに気づいていなかった。目を  
背けたものは何だったのかを。  
父が翌朝出かけるための支度  
をしている。仕事関係の人たち  
と共に、被災地に手指の消毒液  
を届けに行くという。  
翌日の旅程について会話する  
両親の側で、私は身を硬くして  
いた。  
恭太郎も行くかと、父から  
言われるような気がしてならな  
かったからだ。  
私が目を背けたものは、職務  
やボランティアで、被災地のた  
めにとすぐに立ち上がった人た  
ちの奮い立つ心だ。  
しかし、張りつめていた気持  
ちは、父の一言でプツリと途切  
れた。  
「一人でね、涙を見てどう  
と思う。」  
涙を……。  
「子供の頃から、遊んでいた  
浜だ。」  
父は窓に目をやりながら呟い  
た。  
心を一つに復興へ歩む——そ  
の心は個々の人、それぞれ心の  
重なり合いだ。そして、一日  
として同じ日がないように、歩  
こうとする日もあれば、心が動  
かない日もあって当然だと思  
う。疲れてしまったのなら、立  
ち止まればいい。すぐに立ち上  
がれなかつたのなら、遅れても  
立てばいい。  
怖くてせつなくて腰を抜かし  
てしまった私への鼓舞と、勇気  
を持ち立ち上がった多くのの人た  
ちへ敬意と感謝を込め、今思う。  
被災地に本当の光が灯る日まで  
の道のりが長いのならなおのこ  
と、これから多くのことを学び  
私にも、役に立てることがある  
はずだ。  
(指導 對馬亜希子教諭)  
弱い自分に向き合っ  
【講評】震災をテーマにした  
作品が多く寄せられた中、「立  
ち上がらない自分」「がんばっ  
ていない自分」と徹底して向き  
合った出色の作品。考えること  
を放棄しない姿勢と、自分の言  
葉を探そうとする意志が強い印  
象を残す。作者の「問い続ける  
力」に触れるとき、読み手もま  
た自分自身を振り返らずにい  
られない。  
(榎久美子)